

## 校長研修だより189

### 「僕はパティシエになりたいのに」

2025・3・5 重枝 一郎

法隆寺大改修の棟梁であった宮大工の西岡常一さんの内弟子で薬師寺の金堂、西塔の再建に副棟梁として携わった小川三夫さんの著書にこのような話があった。「ねじれ癖のある木をどのように組み合わせていくかがとても重要です。それは人も同じで、それぞれの個性を生かした組み方をすれば、その個人の力量を足したものの以上に力が得られます」という話である。寺院の改修や再建といった現場には、いろいろな人が集まって仕事をする。小川さんは仕事をする際のチームビルディングをする上で、このような考え方を大切にするという。

先生方なら、私が何が言いたいかわかると思うが、学校の仕事も共通するところが大いにある。誰かの「より良い学校づくり」と、違う誰かの「より良い学校づくり」の姿はそれぞれ異なっているかもしれない。しかし、目標を共有し、それぞれの個性を組み合わせることでそこに向かっていくことが大切になる。そのために、互いのよさを認め合い、尊重できる職場にしなければならぬ。

もちろん結果としてどうなっても、最終的な責任は校長である。先生方は心配せず明るく仲良く仕事をしてほしい。校長は、よく“孤独”と言われる。それは判断する時に責任が伴うからだと思う。実際そう思う時は多い。ただ、私は本当に先生方に支えられている実感ももっているため、“孤立感”はない。ありがとう。

私は、もし大きな失敗をしたとしても、時を戻すことはできないので、みんなに謝って軌道修正をすることが大事だと思っている。それが勇気のある人だと思っている。しかし、このマインドをもつには、“孤独であっても、孤立しない”ことが大切になる。そうすることで柔らかに自然と「より良い学校」になっていくと思っている。

このことは、校長でなくてもみんな同じだと思う。リーダー的な役割をもつ、教頭、教務主任、学年主任、部主任、委員長・・・みんな“孤独”を感じる時があるかもしれないが、メンバーは“孤立”させないように支えてほしい。

私はこのような話をするときはいつも、最後の教え子のサッカー部を思い出す。千代中時代のサッカー部である。部員3名から始まり、3年後やっと11名になり、福岡市70校の区大会・市大会を勝ち抜き、県大会に進んだ。そのメンバーの共通項は中学生というだけで、ねじれ癖どころか、まったく大きさも形も違う11名であった。

そのメンバーたちから私が言われた言葉である。

「別にサッカーが好きではない」「パティシエになりたいのに重枝先生から無理やりサッカー部に入れられた」「生徒会長ならサッカー部に入れと理不尽なことを言われた」「不登校ならサッカー部に入っとけ」などなど。

そんな11名が少しずつチーム内での役割が生まれ、それぞれが自己存在価値感をもてるようになり、組み合わせ合った。つまり「大切なひとり」として存在していた。

私たちの仕事もそういうスタートであるかもしれない。しかし先生たちならしっかり組み合わせさせて、個人の力量を足したものの以上の組織になると思っている。